告白2

原田宏二
元北海道警釧路方面本部長
内部告発者は胸を張って
生きていかなければならない。

原田宏二（はらだこうじ）元釧路方面本部長

１９３７年12月18日生まれ。１９５７年４月、北海道警採用。１９７５年４月から警察庁保安部防犯課（係長）、山梨県警刑事部捜査第２課（課長）、熊本県警刑事部捜査第２課（課長）へ出向する。１９８２年３月に北海道警へ復帰し、警務部厚生課長、総務部総務課長、（札幌）西署長などを務める。１９８９年３月、警視正昇任と同時に警務部警務課長。旭川中央署長、防犯部長、釧路方面本部長（在任中、警視長昇任）を歴任し、１９９５年２月、退職。２００４年２月10日、記者会見を開き、警察の組織的な裏ガネづくりを告発した。「市民の目フォーラム北海道」代表として、開かれた警察の実現を目指している。

企業や団体を回り、餞別集め

――２００４年２月10日、原田さんは北海道警幹部ＯＢとして、在職時の組織的な裏ガネづくりを告発します。当時の心境を教えてください。

原田　私は、道警の警察署長や防犯部長、釧路方面本部長などを歴任しました。警察の裏ガネは、異動の際の餞別や部内の懇親会費、冠婚葬祭費、タクシーチケットの支払い、上級官庁や他官庁の接待費、議会対策などに使われており、私も当然、ヤミ手当をはじめとする裏ガネにどっぷりつかっていました。ヤミ手当の額は、署長のときで毎月５万円、防犯部長、釧路方面本部長のときで毎月７～８万円程度だったと思います。道警から見れば、そういう人物の告発はまさに許すことのできない裏切り行為だったことでしょう。

ですが、私も長年仕事をしてきた道警の恥部を好んで暴露したわけではありません。道警の自浄作用に期待していたところもあったんです。２００３年末から『ザ・スクープスペシャル』（テレビ朝日系）の〝スクープ〟をきっかけに、地元紙の『北海道新聞』などが、旭川中央署の不正経理をはじめとする道警の裏ガネ問題を大々的に報道しました。特に『ザ・スクープ』は、私も匿名で取材に応じていました。私は、道民の怒りが集中するなかで、裏ガネづくりを一掃する最後のチャンスだと思い、監査委員や道警の動きを注意深く見ていました。しかし、

【旭川中央署不正経理事件】
１９９５年と１９９７年の北海道警旭川中央署の会計書類から、同署が捜査協力者をでっち上げ、謝礼などを支出していたことが判明。２００３年11月23日、『ザ・スクープスペシャル』（テレビ朝日系）がスッパ抜いた。道警は「不正はない」と言い続けたが、２００４年３月12日、芦刈勝治道警本部長が道議会で旭川中央署の裏ガネづくりを認めた。

かたくなに裏ガネの存在を否定する道警幹部の姿に失望し、告発を決意したのです。

――警察では人事異動の際に餞別を贈る慣習があるそうですが、原田さんが現職時代はいくらくらいもらっていたのでしょうか。また、その原資はやはり裏ガネなんですか。

原田　ほかの人のことはわかりませんが、署長や防犯部長のポストのときは、餞別は総額２００～３００万円程度だったと思います。

警察署などでは、署長から巡査まで餞別でもらう金額が決められており、かなりシステマチックに行われていました。転勤のときに受け取ったのは、ポストに応じて決められた金額に加えて、内部の上司、先輩、同僚、部下からもらう餞別を合わせたものです。

餞別の原資ですが、署長などの所属長クラスや本部長が役職名で渡す餞別はすべて裏ガネ、それ以外の警察官が個人名で渡す餞別は自腹です。逆に言えば、役職名の餞別を1度でも受け取った警察官は裏ガネの存在を知っていたということです。

自腹の餞別はけっこう費用がかさむもので、私も署長になるまでは、年2回のボーナスから餞別資金を貯金していたほどです。署長以上になると餞別は裏ガネから出るので、自分の懐は痛みませんでした。

また、幹部のなかには、転勤の際に企業など、外部の団体へ必要以上に挨拶回